

精神療法

増刊第5号 別刷
2018年5月

米国での精神分析の現在

川畑 直人

Ψ 金剛出版
TOKYO

米国での精神分析の現在

Naoto Kawabata

川畑 直人*

I はじめに

筆者は、米国の精神分析事情を調べる研究者ではないので、この記事の表題にふさわしい内容を書けるとはあまり思えない。ただ、米国で精神分析家になるための訓練を受け、少なからず親交のある米国の精神分析家がいるので、日本の中では米国の精神分析事情について、比較的知りうる立場にあるという自覚はある。また、本特集が掲げる、精神分析の未来地図、正確に言うと、地図はともかくとして、未来についてはそれなりに関心があるので、あくまでも個人的な視点に基づくものであることを断りつつ、精神分析の未来に関わりそうな米国の事情について紹介をしてみたい。

II 精神分析の衰退

筆者が精神分析の訓練を受けに米国に渡ったのは、1997年である。当時、分析家たちの間で話題となっていたのは、米国の医療・保健制度の中で力を増してきたマネジドケアのことであった。前提としては、それまでに米国では、保険会社が精神分析を含む心理療法のサービスをカバーする商品を手がけるようになり、精神

分析は一般市民に利用されやすいものになっていた。しかし米国経済が停滞し、医療費の増大が問題となり始めた1970年代には、医療費を抑制するために治療決定権を保険者が握るというマネジドケアが普及し始め、1990年代には分析家にとっても大きな脅威となっていた。

精神科医療においては薬物療法が、心理学の領域では認知行動療法が、いわゆるエビデンスに基づく治療効果を主張することで受け入れられていく一方、科学的な効果研究が乏しい精神分析への信頼は低下していった。そもそも、高頻度の面接を要し、治療期間も長い精神分析は、保険会社にとっては好まれない選択肢であった。精神分析を学ぶ医師はほとんどいなくなり、医学部、心理学部から力動的な立場の教授陣は徐々に姿を消していった。米国に渡った数日後、米国精神分析の中心ともいえる老舗の分析研究所、ニューヨーク精神分析研究所に、訓練候補生が集まらずクラスが開講できないという話を耳にした瞬間は、今でも鮮明に覚えている。

III 分析理論を巡る議論の活気

筆者が学んだウィリアム・アランソン・ホワイト研究所（以下、ホワイト研究所）は、Harry S. Sullivan, Erich Fromm, Clara Thompsonらが創設した対人関係学派の研究所であり、ニューヨーク精神分析研究所を中心と

*京都文教大学

〒611-0041 京都府宇治市槇島町千足80

京都精神分析心理療法研究所

〒612-8083 京都府京都市伏見区京町4-156-1

する米国の主流派、フロイディアンとは対極に位置している。対極ということと存在感があるが、米国精神分析協会（以下、米国協会）がフロイディアン一色であった時代には、存在すら意識されていなかったというのが実情らしい。

状況が変わり始めたのが1980年代で、その流れを作ったのがホワイト研究所出身の Stephen A. Mitchell である。彼は同じくホワイト出身の Jay R. Greenberg と、「精神分析理論の展開」(原題は『Object Relations in Psychoanalytic Theory』) という本を書き、フロイディアンの欲動論に対し、対人関係学派を含む関係を重視する諸学派を包含する関係論というパラダイムを提示した。その考え方が、全米的に注目を浴びたのである (Greenberg & Mitchell, 1983)。

関係論パラダイムに親和的な精神分析のスタンスは、関係精神分析と呼ばれるが、かなり広い範囲のものを含んでおり、いわゆる学派とか流派というような、統一的な立場を指すものではない。その特徴は一言では言いにくいだが、米国の対人関係論と英国の対象関係論、特に中間派のそれを併せ持つもの、という言い方がされることが多い。前者は、分析状況を二者が交わる対人の場と捉え、その場で起こることをつぶさに見ていこうとする。後者は、発達の中で形成される自己や他者に関する内的な表象の影響力を重視する。一方、臨床実践の態度の特徴としては、前者由来の偽らぬオープンな姿勢、いわゆるオーセンティシティと、後者由来の「抱える環境」としての治療者が強調されることが多い。ただこのようにまとめられるのは、精神分析を包括的に議論しようとした Mitchell の意図から離れる気もする。

2000年12月に Mitchell は50代にして急逝するが、彼の視野の広さ、思慮の深さ、そして誠実な人柄など、彼を直接知る人々にとって、それは悲劇そのものであった。私にとっては、生前最後となった彼のコースワークで、直に学ぶ機会が得られたことは不幸中の幸いであった。しかし振り返ってみると、彼の死が与えたショ

ックの大きさは、一人物の喪失という以上に、彼を中心に繰り広げられる学術的議論の盛り上がり、影が差すのではないかと懸念するところが大きかったのではないかと思う。

そうした議論の場の一つが、米国心理学会の精神分析部会（以下、Division 39）であった。特定の分析研究所から離れたアカデミックな環境で、ニューヨーク大学の Lewis Aron, Jessica Benjamin をはじめとした関係論者、Darlene B. Ehrenberg, Donnel B. Stern, Philip M. Bromberg などホワイト研究所の対人関係論者、関係論者、シカゴ精神分析センターで教える社会構築主義の Irwin Hoffman, 自己心理学派でカリフォルニア大学臨床教授の Robert D. Stolorow, ニューヨークの NPAP 研究所出身の Nancy McWilliams といった人々が活発な議論を交わす様子は、とても印象的であった。Mitchell の死後、国際関係精神分析・心理療法協会が設立されたことで、やや勢力が分散した面があるが、米国内の精神分析に関する議論の場として、どちらも欠かせない存在となっている。

さて、精神分析の社会的地位が低迷している現実や、後で触れる精神分析研究所に対する批判的見解に対比したとき、このような学術的な議論の盛況をどのように理解すればいいのであろう。お気づきと思うが、こうした議論の担い手のほとんどが、サイコロジストである。米国では、長い間、医師以外に正規の精神分析の訓練は施さないという規約が存在していた。その一方で、精神分析の担い手が、医師から非医師に変わるといふ地殻変動が起こっている。そのあたりの事情を、簡単に振り返っておく。

IV 米国における精神分析の担い手

20世紀初頭、米国にとって精神分析は、欧州発祥の輸入しなければならぬ知財であった。それでも、1911年には、ニューヨーク精神分析研究所ができ、その後、1930年代、1940年代には、全米各地に分析の研究所が設置され、それらが連盟するという形で、米国協会の組織

が整備されていった。この間に、米国における精神分析の普及に重要な影響を与える、「1938年ルール」という規約が成立する。その内容は、米国の研究所でなされる精神分析の訓練は、精神科医師にのみ施され、また米国協会の会員資格は、1938年までに欧州で訓練を受けた一部の著名な分析家を除き、医師以外には与えられないというものであった。

創始者である Sigmund Freud 自身は、精神分析の担い手として非医師を排除すべきではないと考えていた。この方針は国際精神分析協会（以下、国際協会）でも共有されていたので、米国協会は簡単に決定できるものではなかった。しかし、第二次世界大戦が勃発し、国際協会が機能停止する中で、米国協会は単独でこの規約を通してしまった。

非医師を排除するという方針が出された背景には、勝手に精神分析家を名乗り、精神分析とは似ても似つかぬ乱暴な施術を行う者が横行していたという社会事情があった。と同時に、ナチの席卷により欧州から流入する非医師の分析家との競合が懸念されたということもあるらしい。いずれにせよ、非医師を排除することによって、米国の精神分析は精神医学との結びつきを強め、世界的には珍しい力動精神医学の国が生まれることになる。

しかしながら、こうした動きとは裏腹に、第二次世界大戦は、米国精神医療に別の形の地殻変動を引き起こすことになる。大戦への参戦によって生じた多数の傷病軍人が、病院で治療を受けるようになり、その手当が国家的な課題となった。多くの病院で、戦争傷病者の治療を標的としたプログラムが作られ、研修医の参加が奨励された。しかし、医師にとっては収入の良い個人開業の方が魅力的で、研修期間が終わると病院勤務を離れる者が続出した。そこで目をつけられたのが、クリニカル・サイコロジストであった。病院は、プログラムにサイコロジストの実習生を積極的に受け入れ、傷病者対応の戦力にしようとしたのである。一方、新興のク

リニカル・サイコロジストにとっては、病院は貴重な就職先となった。また当初は、心理検査などのアセスメント業務が中心であったサイコロジストにとって、治療の担い手になる機会が生じたのである。

治療に携わるようになると、サイコロジストたちも、より専門的な治療技術を身につける必要が生じてきた。そして、系統的な精神分析の訓練を希望する者が増えてきた。こうした事情の元、1938ルールによって米国協会から離れた精神分析家や、研究所は、サイコロジストに対する教育訓練を引き受けるようになる。Freud が非医師の分析家について論文を書ききっかけを作ったとされる Therdor Reik が、亡命先のニューヨークで創始した NPAP 研究所や、心理学者・社会学者である Erich Fromm を擁することで米国協会とは別の道を歩むことになったホワイト研究所は、サイコロジストたちの重要な受け皿となった。また、フロイディアンの中でも、IPTAR やフロイディアン・ソサイエティといった、非医師を受け入れる研究所や協会を作る動きが起こってきた。

さらに、こうした動きは、サイコロジストにとどまらず、ソーシャル・ワーカーの中にも生まれてくる。ソーシャル・ワーカーは、貧困や障害によって支援を必要とする対象者に関わるため、病院、診療所、福祉施設など公的機関で仕事をするのが通例であるが、サイコロジスト同様に治療の担い手となるにつれ、分析の訓練を受けて開業を目指す人々が出てくる。現在では、ソーシャル・ワーカーに分析訓練を行う研究所が多数存在している。

こうした社会の動きにもかかわらず、医師以外に訓練を行わないという米国協会の姿勢は変わらなかった。例外的な事例として、科学的な研究を推進するために、数名のサイコロジストが訓練生として受け入れられるということもあった。しかし、それはあくまで研究に携わるためのものであり、治療のために精神分析は行わないという誓約書まで書かされたのが実情で、

その中には、George S. Klein, Fred Pine, Donald Spence など、著名なサイコロジストが含まれていた。

こうした米国協会の体制を根本的に揺るがす訴訟が、1985年の3月、4人のサイコロジストによって引き起こされた。Division 39の中に設置されたGAPPPという団体の賛助を得て、数千人の指示者を代表しての集団訴訟であった。その主張は、米国協会と協会に所属する一部の研究所は、精神分析の独占を策謀し、自由競争を回避することで、患者、保険会社等が支払う料金を不当につり上げ、反トラスト法を侵害しているというものであった。1988年の11月に、米国協会は全面的に譲歩し、サイコロジストをはじめとして非医師の訓練生を排除しないという約束をすることで、和解が成立した。以後、米国協会所属の研究所は、非医師に対して門戸を開放することになる。50年の歳月を経て、1938年規約は、米国から消え去ることになった。

筆者がこのことを知ったのは留学中で、最初に話してくれたのは留学中に大変お世話になったPineであったと記憶している。彼は、先に触れた、研究者としてニューヨーク研究所で訓練を受け、Margaret S. Mahlerと分離個体化の研究を行ったサイコロジストで、後にフロイデアン・ソサイエティのメンバーとなり、この訴訟が起きた当時は、Division 39の会長でもあった。サイコロジスト集団の目に映る彼の立ち位置は微妙であるが、二級市民的な立場を忍んで訓練を受けたサイコロジストとして、この訴訟の結末は感慨深いものがあつたろうと想像する。なお、この訴訟が起こった当時、国際協会の会長となったRoger S. Wallersteinは、一連の経緯を一冊の本にまとめ、歴史的な事実を詳細に報告しているので、関心のある方はそちらに見てほしい(Wallerstein, 1998)。

V 精神分析研究所の課題

さて、時を進めて現在であるが、精神分析が

苦境にある状況は、大きく変わってはいないように思われる。しかし、それは特に、学術的な世界というより、経済的な面で顕著である。

学術面では、必ずしも低迷とはいえないだろう。例えば、精神医学、心理学、クリニカル・ソーシャル・ワークの精神分析関連団体が、共同で精神分析的診断マニュアル(PDM)を編集するという画期的な動きが出ている。初版は2006年に刊行され、2016年には第二版が出ている。このマニュアルでは、深層から表層にかけての情動、認知、社会的関係パターンを広く見渡し、個人ごとの特性をなるべくきめ細かく捉えようとしており、DSMを補完するものたらんとしている(PDM Task Force, 2006)。全体を通して、精神分析特有の古風で難解な記述は避けられ、なるべく平易で読みやすい表現で書かれているのも特徴である。

筆者は、2014年のDivision 39の大会に参加したが、10数年前と変わらない活気を感じる事ができた。特に印象深かったのは、異文化接触、難民問題、災害、戦争など、社会的な問題が活発に議論されていたことである。心理学会の部会であるということもあるが、柔軟な発想で精神分析的観点を生かしていこうという機運が強く感じられた。

こうした学術面での活気は衰えているようにみえないが、精神分析研究所についていうと、多くの研究所で、訓練生を集めるのに苦勞しているという実情は続いており、経営面での苦勞は絶えないようである。

こうした状況を意識してなのか、Otto F. Kernbergが、精神分析の教育に内在する問題について書き綴った著作を刊行している(Kernberg, 2019)。Kernbergといえ、米国の精神分析、力動精神医学を代表する人物であり、国際精神分析協会の会長も務めた重鎮であるが、彼が50年に渡る経歴から導き出した、精神分析の教育システムに対する批判点が1冊にまとめられている。

彼が主に批判を向けるポイントは、精神分析

の世界で十分な研究がなされてこなかったこと、そして、教育分析家の制度がもたらす権威主義的な組織構造である。

精神分析の研究所は、100年前にはじまったアイティンゴン・モデルと呼ばれる教育分析、スーパーヴィジョン、コースワークという3本柱を基本構造として踏襲している。このモデルでは、教育分析家になれる人々を頂点にしたヒエラルキーが形成され、その選考基準に明文化されない要素が含まれるため、組織には疑心暗鬼が生まれる土壌が用意される。また、教育分析家と訓練生との関係は、その他のファカルティ・メンバーが介入しにくい閉じられたものになりやすく、結果として、訓練生の教育・訓練を組織全体が支えるという構図が作られにくくなる。

さらに、教育分析家を中心としたシニアの分析家たちは、赤裸々に事例を発表する義務を免れており、さまざまな形で権威が守られるようになっていくという。学ぼうとする精神分析のモデルが提示されない中で、訓練生は理想化された分析家のイメージに同一化することになる。

教育分析家を頂点とするヒエラルキーの問題は、研究所の保守的性格と、科学的革新性の欠如という問題にもつながっていく。多くの研究所では無批判にFreudの著作を読むことからはじめ、それに時間をかける。新しいアイデアは、一部紹介されるとしても、本体には影響を与えず、時の経過とともに流されていく。また、実証的な調査や研究は、精神分析臨床の実態に合わないという理由で、着手されないことが正当化されてきた。

Kernbergの批判はさらに、スーパーヴィジョン、研究所の組織体質、研究所のリーダーシップのあり方にまで及んでいる。一つの章では、「分析訓練生の創造性を破壊する30の方法」という見出しの下、訓練生の受け入れ手続きの時間の長さ、Freudの全著作の読破、研究所で好まれる理論に疑問を唱える訓練生に注意を払う、学術集会にあまり早くから行かせない、など、

具体的に研究所がとりがちな姿勢を辛辣に挙げ連ねている。

さて、Kernbergの研究所批判には、タピストック人間関係研究所の組織論的な観点が、ふんだんに盛り込まれている。彼は、以前から、パラノイド生成的なリーダーの影響力に関心を持っており、そうした組織病理に対する関心が、精神分析研究所の構造に向けられている。この組織論的な観点は、ホワイト研究所に存在していた組織プログラムにも流れ込んでいて、その関係者の一人であるKenneth Eisoldが、Kernbergの著作の書評を書いており興味深い(Eisold, 2017)。Eisoldの目からすると、Kernbergの観点には、別の意味での偏狭性があるという。

Kernbergは、研究所の体質を正し、科学的研究を推進し、訓練生に正しい精神分析のあり方を教えることができれば、精神分析の潜在的凝集力を高め、かつてのような優越的なポジションを回復できると考えているように見える。しかし、精神分析を、統一された一定の様式をもつ実体として定義できると考えるのは、もはや幻想ではないかとEisoldは主張する。分析の訓練を受けて分析家が獲得するのは、分析家ごとに異なり、その後の臨床実践では、臨床現場の特質、出会うクライアントの性質に応じて変化せざるを得ない。それぞれがそれぞれの精神分析のあり方を創造する。そして、必ずしも明文化されないが、各自が独自の治療論をもつようになるとEisoldはいう。

このことに関連して、Eisoldは、Kernbergの視点が、精神分析協会と力動精神医学の中核からのものであるという点に注目する。そうしたごく一部の中核を除けば、多くの臨床家は、サイコロジストであったり、ソーシャル・ワーカーであったり、あるいはEisold自身がそうであるように、組織コンサルタントやビジネス・コーチという顔すら持つ。彼らが仕事をする現場は多種多様であり、精神分析的観点が生かされるあり方もさまざまである。そうした多様な職種の人々が、力動的な観点を体得するに

は、やはり訓練が必要であり、それを担うことが、研究所の存続・発展につながるのではないかと Eisold は指摘する。

VI おわりに

本稿では、米国の精神分析の動向を、担い手となる職種の変化と結びつけながら眺めてきた。1938年ルールによって、米国の精神分析は、ある意味で世界的に珍しい道を歩んだといえる。非医師の排除により、力動精神医学が発展し、一方で排除された新興のサイコロジスト、ソーシャル・ワーカーが、貪欲に精神分析の知を吸収することによって、学術的な深化と、治療モダリティの多様化が進んだ。そうした歴史がもたらした成果は、未来に向けての貴重な財産ともいえる。

しかしその財産は、精神分析の組織中枢を構成する人々に、吸収されたのだろうか。そして、分析家集団から遠く離れた、一般の人々は、これらの財産を精神分析のものとみなしているであろうか。内部にある排除の論理によって、生み出された新しい知見は精神分析とは異なる療法として概念化され、外部にある単純化の論理によって、いまだに精神分析は Freud と等式で結ばれている。

内外の論理に屈することなく、これらの遺産を精神分析の血肉にしていくことができるなら、新しい精神分析の未来を切り開くことができるのかもしれない。その変革作業には、精神分析に関心を持つ人々自身の、抵抗の克服が必須である。創始者が用いた比喩、「純金と合金」「すばらしい孤立」と言った表現が、思考を拘束する呪縛となっていないか、一考の価値がある。米国の精神分析に期待できるのは、そうした変革の潜在力であろう。

文 献

- Eisold K (2017) What's Wrong with Analytic Training? *Contemporary Psychoanalysis*, 53(2): 280-287.
- Greenberg JR & Mitchell SA (1983) *Object Relations in Psychoanalytic Theory*. Harvard University Press. (横井公一監訳/大阪精神分析研究会訳 (2001) 精神分析理論の展開. ミネルヴァ書房)
- Kernberg OF (2016) *Psychoanalytic Education at the Crossroads*. Routledge.
- PDM Task Force (2006) *Psychodynamic Diagnostic Manual*. Silver Spring: Alliance of Psychoanalytic Organizations.
- Wallerstein RS (1998) *Lay Analysis: Life inside the Controversy*. The Analytic Press.